



巻頭言：私と図書館

河田康志 1

特集 鳥大生と図書館

『図書館』を考える

田村 丹 2

学生目線の医学図書館を目指して

高橋雅子 4

図書館への期待

西野 縣 5

ビブリオバトル

稲本俊彦 6

ビブリオバトルに携わって

長谷川美晶 7

平成 25 年度大学図書館職員長期研修に参加して

津村光洋 8

ミニ・シリーズ 情報検索コーナー

9

図書館の本の並び方（日本十進分類法）

トピックス

10



鳥取大学附属図書館報 “Library” No.123

<http://www.lib.tottori-u.ac.jp/>

(2014年4月)

巻頭言

私と図書館

河田 康志

私の図書館のイメージは、「夏は涼しく、冬は暖かく、静寂でゆったりとした時間が流れている、独特の空間を提供してくれる場所」である。数え切れない知識（情報）とデータを収蔵している様々な書籍が一堂に会している場所、そしてその恩恵をゆったりと享受できる場所、それが図書館。

私が小学校の頃は、本は小さな本箱に整列された、“文庫”のようなものだった。中学、高校でも本箱は少しは大きくなったが、そのイメージはあまり変わらなかった。図書へのイメージが大きく変わったのは、やはり大学の図書館を見たときである。ありとあらゆる分野の本だけでなく、科学専門書まで揃えられていて、それらの周りには閲覧のためにパーソナルな机と椅子が用意されており、そこで気が済むまで本や雑誌を読み、自分勝手な勉強までできるようになっていた。誰か人に邪魔されたくないときには、図書館の奥まった一人用の机を占領して一日中ゆったりと過ごすのが好きだった。静かでゆったりとした時間が豊富にそこには流れていた。

このスタイルでの大学の図書館の利用は、1991年の夏に私がアメリカ合衆国のアイオワ州立大学に博士研究員で滞在したときにもあり、大変お世話になった。専門書の科学ジャーナルの閲覧や外国での手持ちぶさたで中途半端に時間のあるときには、このスタイルでの大学の図書館の利用方法は大いに重宝し、嬉しかった覚えがある。特に、様々な科学雑誌のバックナンバーが揃っている書庫エリアを見て回るのは、これまでの多くの科学者の努力と苦勞の結晶を目の当たりにしているようで、身が引き締まる思いがした。その頃か

ら、図書館のあるコーナーでは、ビデオや音楽も楽しめるようになっていて、‘文字を読む’図書館から、‘見て聴く’こともできる図書館になったことには感心したことを覚えている。



図書館のイメージでさらに強烈だったのは、イギリスのオックスフォード大学のボードリアンライブラリー(Bodleian library)を見たときであった。1996年に滞在していたイギリスのオックスフォード大学でも同様に私は図書館巡りが好きだった。しかし、ここでの印象は私にとってこれまでのイメージを塗り替えるものであった。オックスフォードのダウンタウンの中心近くに半円状の屋根をした特徴的なラドクリフカメラの建物の隣にこのボードリアンライブラリーはある。まず、最初にこのライブラリーを利用するときには、その前に公式宣誓文に同意することが義務づけられていた。「図書館の中にあるものすべてに対して損傷行為などを行わないこと、火や炎を持ちまず、喫煙をしないこと、あらゆるルールに従うこと」という趣旨の書き物を見せられて宣誓をさせられたことを覚えている。これは、中に実際に入ってから、その意味するところがしっかりと理解できた。14世紀頃からの書物が1000万点以上も収蔵されている図書館である。重要文化財とでも言える。大きくて古い‘本’の裏表の表紙は木製の板で作られており、鉄のチェーンで結わえられて鍵がかかっているものまであった。当時、その本を読むためには、本自体も大変大きく

て重いので、大きな机にまず乗せてから、鎖で閉じられた木枠の鍵を開け、分厚い木製の表紙をあけて読む必要がある。このような威厳のある古い本が天井まで届く木製の頑丈そうな本棚に整然と並べられている光景は圧巻であり、その場所にいると、何かしら古の時代の人々やその本を作った人、読んだ人の魂の声が聞こえてくるような気がして、畏敬の念で身震いした。

鳥取大学の中央図書館は、大きさや収蔵量などでは上述のアメリカやイギリスの図書館と比べられないが、改修工事が行われてからずいぶんと快適でモダンになったと思っている。明るく冷暖房完備で学生にとっては快適な場所だと思う。科学論文などのバックナンバーは電動または手で楽に動かせる新しい書架に配置されていて、快適に探せるようになっている。手に入りにくい論文は以前は図書館を通じてコピーの依頼をよくしていたが、ここ10年近くはインターネットの発達と多大な経費をかけての契約のお陰で、たいいてい論文は pdf として即座に入手できるように

なった。そのため、私も図書館にはなかなか行く機会がなくなってしまったのは事実である。しかし、雑誌や本を実際に手にとって見る、本の独特の臭いを嗅ぎながら分厚いページをめくる感覚は、図書館ならではの醍醐味であろう。また本来、図書館は先に述べたように‘ゆったりとしたゆとりの思考と静寂な固有の時間と空間を提供する場所’である。日々の煩雑さから逃れて少しの間、我に返る時間を求める人をいつでも優しく迎えてくれる場所として、今後も在り続けてほしいと願っている。

(かわた やすし : 工学研究科長/工学部長)



特集 鳥大生と図書館

『図書館』を考える

田村 丹

多くの学生にとって、図書館とは、必要に迫られて訪れる場所であろう。

大学の図書館であれば、勉強や休憩のために静かな空間を求めて使用する場合を除くと、講義で課されたレポートを書くために、テスト勉強のために、あるいは論文を執筆するた

めに、資料を求めて来館することが殆どではないだろうか。

レポートの課題に関連した資料を探し、研究テーマに関する資料を探し、論文執筆のために参考資料を探すことだけが、大学の図書館の利用方法だと思っている人は、決して少

なくないはずである。

確かに、様々な利用者の求めに応じられるだけの必要な文献資料を収集し、管理することは、図書館の主たる義務である。しかし、利用者にとっての図書館の本当の価値は他にはないだろうか。

私が考えるに、「利用者自身の可能性を広げる機会」を与えてくれる場所。

それが図書館の私達利用者にとっての本当の価値ではないかと、私は考える。

目先の課題の解決のためだけでなく、多様な人々が書籍と簡単に出会うことができ、多くのことを学び、創造する場所として、図書館こそ最適な施設ではなからうか。

そんな図書館に私が期待すること。それは利用者に対しても、であるが、利用者のマナー向上による快適な場所の提供である。

私が子供だった頃、図書館に限らず公共施設で騒ぐと、必ず大人に他の利用者に迷惑だと怒られたものである。しかし、現在、法律的に大人、もしくは大人に近い存在である私たちが利用する中央館ではどうだろう。分別されておらず、溢れかえったゴミ箱、放置されたまま山積みされた書籍、飲食、席とりに談笑、さらには携帯電話やスマートフォンの充電など、決して知のある大人な振る舞いを行っているようには思えない。まるで商業施設や個人の家に居るみたいに振る舞っている学生が多いと感じる。むしろ未成年である中・高校生の方がマナー良く、勉学に励んでいるように思われて仕方がない状況である。

また、特に私が気になっているのは、書籍の扱い方である。何の気無しに手に取った書籍には下線が引いてあったり、ゴミが挟まっていたり、さらには破れかけた書籍も多く見かける。

モノはいずれ壊れる、確かにその通りではあるが、保存方法や利用する者の気持ち次第では、書籍は半永久的存在として、我々に先人たちが培ってきた多くの価値観を運んでくれるものであり、私達は書籍を次の世代に受け継がなければならない使命があることを認識してほしい。

図書館は何をする場所であろうか。もう一度考え直して欲しい。図書館が我々利用者のためにできること。我々利用者が図書館や書籍のためにできることを。

(たむら あきら 農学研究科生命資源科学専攻 1年)



学生目線の医学図書館を目指して

高橋 雅子

私は今まで1年間医学図書館で夜間アルバイトをしてきました。その中で、図書館を学生が利用する場としてのみならず、学生の意見を最大限に取り入れ、学生とともに作り上げていく空間とするべく図書館が取り組んできた工夫について、簡単に書かせていただきたいと思います。

・ブックハンティング

ブックハンティングとは、学生の中から希望者を募り、図書館の本を地元の本屋さんで思い思いに選ぶというイベントです。私もこのブックハンティングに参加し、本当にたくさんの本を選ぶことができ、とても楽しい時間を過ごすことができました。医学図書館というと、医学書しか置いていない、というイメージをもたれる方が多いと思いますが、医療系マンガ、小説をはじめ、料理本、旅行本、・・・と、様々な興味深い本が医学図書館にはあります。みなさん、勉強に疲れたら、ぜひ一階の新作コーナーをのぞいてみてくださいね。そして、この記事を見てブックハンティングに興味を持たれた方は、ぜひ気軽に図書館カウンターまで声をかけてください。多くの方に参加してもらうことは、より多くの方の意見を反映した図書館づくりにつながります。奮ってご応募ください！

・人体模型

人体構造の教科書を読んでも、いまいち3Dでイメージがわからない・・・。そんな風に困ったことはありませんか？私は脳の

構造を勉強しているとき図書館で脳の模型を借りて、本と照らし合わせながら覚えていくと、不思議なことにすっと頭に入りました。

人体模型は、学生の希望により次々と新しい模型が図書館に入っています。カウンターに声をかけてくだされば、館内で自由に模型に触れることができ、本だけでは理解が難しい立体構造なども手に取るようにわかります！ガッツリ勉強に役立てたい方も、ちょっと見てみたい、というかたも、気軽に声をかけてくださいね！

・協力用図書・希望図書

皆さんは、図書館1階に協力用図書コーナーがあることをご存知でしたか？実は、このコーナーの本も学生アルバイトスタッフがコーナー本入替の際に学生を代表して選んでいます。学生の皆さんも、気になっている本が医学図書館に見当たらなければカウンターに声をかけてください。県内の図書館から無料で取り寄せできる場合もありますし、医学図書館に備え付けて欲しい図書の希望も受け付けています。

この記事を読んで、医学図書館を今までより身近に感じていただけると幸いです。「図書館がもっと〇〇だったらいいのに・・・。」と何か気づいたことがあればぜひ教えてください。図書館について感じたこと、わからないこと、困ったことなどあれば、カウンターまで気軽に声をかけてくださいね。

(たかはし まさこ 医学部医学科2年)

図書館への期待

西野 縣

図書館は、知の結集である。最新の本や雑誌、古くからある様々な分野の本まで、充実している。そこでは、人々が本を楽しんだり、知識を習得したり、自らの学習をしたり、様々な知の統合が行われている。最近では館内にパソコンが置いてあるところも多く、図書館も時代とともに変化している。また、最近電子書籍を導入しているところも増えており、利用できる幅が非常に広がっている。では海外の図書館ではどのような具合なのだろうか。基本的な利用方法に変わりはないと思うが、例えば、カナダの **Toronto Reference Library** では、人々は1階に限り、飲食をしながら、本や新聞を読んだり、お喋りをしたり、自分のデバイスを使ってブラウジングをするなどしている。2階以上では飲食は禁止だが、多少の会話は可能である。この点は繊細な日本文化とは少し違うようである。また、自身のIDがあれば、本も借りることができ、図書館のパソコンも利用できる。館内には **Free Wi-Fi** があり、インターネットへの接続も困ることはない。日本と違う興味深いところは、出口にセキュリティと言う名の、いわゆるガードマンが待機しており、帰る人のカバンの中を確認する。借りた本や、その他何か無断で持って帰っていないかを確認している。

図書館は国内外関係なく、知の結集であり、人々が利用する目的は同じであると考えられる。

医学図書館も、時代の変遷とともに、毎年変わってきている。最近では、パソコンやDVDだけでなく、プロジェクターまで館内で借りることができ、非常に充実した設備で

あると思う。ここまで変化を見せることができてきているのは、利用者のご意見箱を設けたり、なんでも尋ねてくださいとカードを作ったり、司書の方々が、日頃から利用者の意見に耳を傾けているからだと考えられる。しかし、今後図書館が万人に共通して、快適に利用されていくためには、利用者がこれからも良い意見を継続して出していくことが求められると私は思う。単に図書館からのサービスを受け、利用するだけではなく、利用者のその時の新鮮なニーズを司書さんたちへ届け、今後も時代に合った、モラルや秩序が保たれた、職員の方々の、地域の方々の、これからの後輩たちが利用しやすい、さらに良い図書館になっていくことを願っている。



(Toronto Reference Library)

(にしの あがた 医学部保健学科 4年)



ビブリオバトル

稲本 俊彦

ビブリオバトルとは、5分間、自分が選んだ本をパワーポイントや原稿なしの臨場感あふれる書評をプレゼンテーションしていき、いかに聞いている人に読みたくさせるかを競うもの。本好きの本好きによる本好きのためのプレゼンテーション大会である。これが、私の感じるビブリオバトルだ。

ただ、初めに私がこの言葉に出会ったときは何のことかさっぱりわからなかった。このときはまさに「ビブリオバトル？」の状態です。文字通り本関連の戦い (biblio battle) なのかと思ったものだった。もちろん、学内でのビブリオバトル参加者を募るチラシを見たため、すぐにその趣旨は理解できたが、インターネットの動画サイトやビブリオバトルの web ページを見ても、よくわからなかった。一つだけ心に響いたのが「何だかおもしろそうだ」ということだった。本好きの人が集まって、各々が本への思いを熱く語る。そんな空気を共有したいと思い、昨年の大学祭期間中のビブリオバトルに参加した。

このときはとても幸せな時間だった。学部も学年もバラバラな参加者たちが、様々なジャンルの本について熱弁する。あえてクライマックスを言わずに続きが気になったり、本から得た知識を交えて発表するスタイル。観戦者の反応もよく、会場全体が熱気に包まれていた。投票の際は迷いに迷って、甲乙つけがたいとはこのことをいうのだと感じたくらいだった。それぐらい、プレゼンテーションのレベルが高く、会場の空気に酔っていたのだ。最初に感じた「何だかおもしろそうだ」という自分の直感が間違っていなかったと、このとき確信した。

実は、冒頭での私のビブリオバトルについ

ての説明よりも、「知的書評合戦」というなんだかカッコイイ別名によってビブリオバトルをシンプルに説明できるのである。つまり、ビブリオバトルとは自分が読んだ本の内容をしっかりと人に説明できる理解力およびプレゼンテーション能力が要求される文字通り「知的」な「遊び」なのだ。

また、現代では、書評の情報交換自体が web 上にゴロゴロしているため、友人同士での情報交換が少なくなっているのではないかと感じている。毎日、本 (教科書も含む) に囲まれた生活をしているのに情報交換の機会はあまり設けない。個人個人は自分の知らない本をたくさん読んでいるはずである。そう感じたとき、ミニビブリオバトルを開いてみることをオススメしたい。そこで、新たな発見が生まれるかもしれない。ビブリオバトルへの参加経験者が感じたことである。

本は人生を豊かにする。当たり前のことだが、娯楽が多くなった今だからこそ声を大にして言いたいことである。おそらく、大学生の間が人生で一番本をたくさん読める機会であろう。大学生の皆さん、新学期から Let's 読書習慣！そして、図書館や書店へ Go！

(いなもと としひこ 農学部生物資源環境学科
2年)



ビブリオバトルに携わって

長谷川 美晶

昨年10月の風紋祭にて開催されたビブリオバトル in 鳥取大学で、わたしは運営・司会、また出場者として携わらせていただきました。同じく昨年開催されたブックハンティングに選書委員として参加した折、そちらの繋がり、初めて「ビブリオバトル」の存在を知りました。

ここで、ビブリオバトルについて少し説明します。「ビブリオバトル」は「知的書評合戦」とも呼ばれ、それぞれが持ち寄った本について一人5分程度で書評をし、参加者全員で2～3分のディスカッションを行います。そして最後に、「どの本を一番読みたくなったか」という基準でチャンプ本を決めます。

前述しましたように、わたしは今までビブリオバトルというものを全く知らないという状況で、運営として、また出場者としても、右も左も分かりませんでした。運営は3人、さらに出場者もなかなか集まらず、不安を抱えたまま当日をむかえました。しかし、いざ始まってみれば、飛び入り出場の方多数、参加者50人超という大賑わいとなりました。運営としてイベントの成功は嬉しかったですし、また、本好きの方がこんなにも沢山集まってくれたことが、わたしは何より嬉しく思いました。あんなに多くの本好き同士が集まり、意見交換ができるような機会はそうそう無いのではないのでしょうか。大変貴重な体験ができました。

今回のビブリオバトル in 鳥取大学はとても成功したと思います。しかし、ビブリオバトルの知名度はまだあまり高いとは言えません。ビブリオバトルをより多くの人に興味を持ってもらうために、わたしはビブリオバ

トルの「気軽さ」を知ってもらいたいと思っています。「人前で発表」と聞くと、場慣れしていない人は少なからず身構えてしまうのではないのでしょうか。わたし自身、人前に立ってプレゼンをしたり、発表したりすることはとても苦手です。しかし、ビブリオバトルでは、「上手く話そう」といった気負いは必要ありません。好きな本の感想を、素直に、自由に発表すれば良いのではないのでしょうか。ここで一番大切なのは「楽しむこと」だと思います。ビブリオバトルをより多くの人に興味を持ってもらい、楽しんでもらうためには、発表者自身が気負いすぎず楽しんで本の紹介ができること、そしてそういった会場作りが必要になると思いました。

現在、図書館を利用する人、そもそも本を読む人が減ってきているのが現状ですが、ビブリオバトルの楽しさを、さらには読書の楽しさをもっと多くの人に知ってもらうためにも、ビブリオバトル in 鳥取大学が今後も続いていけばいいなと思っています。

(はせがわ みあき 地域学部地域文化学科 1年)



ビブリオバトル in 鳥取大学

平成 25 年度大学図書館職員長期研修に参加して

津村 光洋

2013 年 7 月 1 日から 7 月 12 日まで、筑波大学で開催された平成 25 年度大学図書館職員長期研修に行かせていただきました。この研修は、全国の中堅大学図書館職員に学術情報に関する最新の知識を教授し、職員の資質とマネジメント・企画等の能力の向上を図ることを目的とするもので、国立大学職員を中心に 35 名が参加しました。

講師は大学教員、大学図書館職員、公共図書館職員、出版業界などの第一人者の方々が担当し、内容としては大学図書館をめぐる最新の動向、例えば国の高等教育政策、学術情報流通、ラーニングコモンズ、ERDB、ディスカバリーサービスといった話題が取り上げられました。また、少人数のグループ討議にもかなりの時間が割り当てられました。

講習のなかで繰り返し指摘された点の一つは、近年の大学における教育が、講義形式の一方的な知識の伝達からアクティブ・ラーニング、つまり、学生の主体的・能動的な学びを引き出す教授法が重視される方向に移行しつつある点です。一つの単位を取るため、学生は講義に加えて、自学自習をすることが必須であり、これが今後図書館の担うべき役割とも深く関わっているといえます。これと関連して、最近注目を集めている 2 つのラーニングコモンズ、千葉大のアカデミックリンク、同志社大の良心館の事例を、計画段階から関わってきた担当者の方から直接聞くことができました。それによると、学生のアクティブ・ラーニングの支援こそがこうした施設の目指すところであり、従来のように図書館が個別・単発で実施する講習会に加えて、教員による大学の授業にどのように図書館がコミットしてゆけるかが重要であることをいずれの講師も強調されていました。講義

の後、つくばエクスプレスに乗って有志で東京大学や千葉大学の図書館の見学に出かけましたが、とくに千葉大のアカデミックリンクでは、講義内容を念頭に置きながら実際に施設の見学することができました。

また、印象に残った話として「組織を運営する際に、目に見えるモノ・カネは資源として重要視されるがヒト、つまり人的資源は目に見えないため軽視される傾向がある。しかし、本当は人的資源こそが重要」といった指摘がありました。私立大の講師の方は、国立大の管理職には優秀な人が多いと述べておられましたが、こうした人材こそが大学にとっては宝であり、アウトソーシングという避けられない流れの中で、人的資源をいかに育て、維持してゆくかは大学にとって今後の大きな課題であろうと思います。

様々な講義の内容を振り返ってみると、私が就職したころと比べると、図書館の業務もずいぶん様変わりしたのだと思います。こうした変化に対応してゆくには大変な面もありますが、全体として大学図書館にはこれまで以上に高度な役割を期待され、様々な面白い仕事ができる可能性が広がってきているといえます。これからもこうした変化を楽しみながら、日々の業務の取り組んでいきたいと思っています。

2 週間の研修期間を過ごした筑波大は緑豊かな恵まれた環境で、猛暑が始まる前でもあり、大変快適に過ごすことができました。また、講義の後には受講者で集まって食事等に出かけ、さらなる交流に勤めました。周囲に飲食店が少ないため、研修中に筑波センター付近の全ての店を制覇したという人もいましたが、おかげで数多くの他大学の職員と知り合う機会ができました。

最後になりますが、研修中にいろいろとお世話をしていただいた筑波大の担当者の皆様と、長期にわたる研修に快く送り出しいただいた職場の皆様に、この場をかりてお礼

を申し上げます。

(つむら みつひろ 附属図書館司書)

ミニ・シリーズ 情報検索コーナー

図書館の本の並び方（日本十進分類法）

図書館情報課 学術情報担当 中谷 昇

私が大学において図書館情報学を学んでいた頃、他の専攻の学生から「図書館の本は何がどこにあるかわからない」と言われることが多々ありました。図書館の図書は、その大半が体系的な分類に従って配架されています。しかし、その分類自体を、図書館職員以外の方が知る機会はありません。

そこで今回は、図書館での効率的な情報検索のため、図書館において図書の整理に用いられている分類法、日本十進分類法についてご紹介します。

日本十進分類法（NDC）は、現在日本の図書館において最も多く採用されている図書分類法です。その構成は、知識の総体を九つに区分し、十進記号（0～9の数字、0は総記）を当てて、それぞれの区分枝についてさらに0～9の区分枝を与えることを繰り返すことで、三桁以上の記号としたものとなっています（図1）。図2のように、図書館の図書の背表紙に貼られているシールの上段に書かれた数字がそれです。

∴		5[00]	工学
4	自然科学	54[0]	電気工学
5	技術.工学	549	電子工学
6	産業	549.3	電子回路
∴		549.34	増幅回路

図1：日本十進分類法の類目例



図2：図書館の図書の背表紙

附属図書館を含む多くの図書館では、これに従って図書を分類し、序数的に図書を並べています(図3)。この分類さえ知っていれば、大抵の図書館では資料探しに迷うことはありません。

また、この分類に従った配架では、それぞれの棚に、同じもしくは類似した分野の資料が集まっています。これを利用し、特定分類の書棚を直接視認して必要な資料を探す「ブラウジング」という情報検索の方法があります。

ブラウジングでの情報検索は、研究やレポートのテーマが明確に決まっていなかったり、特定のテーマについて幅広い情報を集めたいときなどに有効です。簡単に特定されたデータを見つけることのできる電子端末などでのキーワード検索と違い、ブラウジングは非効率的と捉えられがちですが、キーワード検索で見つけられない資料(検索語の同義語・類義語が用いられた資料)が発見しやすかったり、その場で内容の精査を行うことができたりと、キーワード検索にはない長所も多くあります。

もれなく確実な情報収集のため、また図書館をより使いやすいものにするため、図書館での図書の分類とその並び方を意識してみてもいいでしょう。

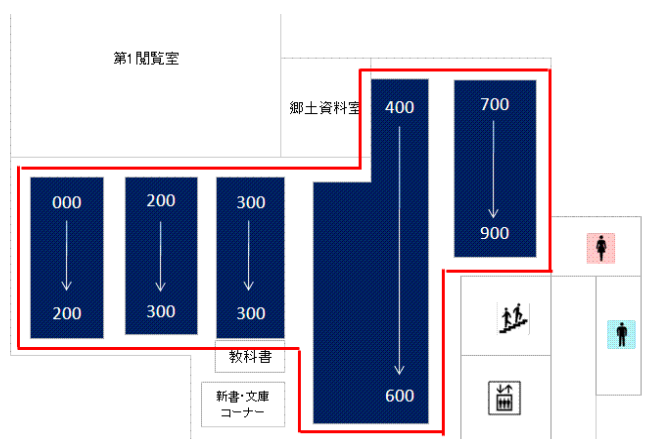


図3：附属図書館2階の配架図

トピックス

平成25年度地域貢献事業 シンポジウム『地域のビジネス支援と図書館の活用』を開催！

鳥取大学附属図書館では、平成25年度地域貢献事業としてシンポジウム『地域のビジネス支援と図書館の活用』を鳥取県立図書館との共催で、平成25年11月2日(土)に鳥取県立図書館大研修室で開催しました。また本シンポジウムには、鳥取県をはじめ14機関に後援いただきました。鳥取大学附属図書館と県内の公共図書館を中心とするネットワークが機能することにより、地域の産業振興に貢献する可能性について検証するシンポジウムで、二部構成で開催いたしました。第一部は、中小企業に関する政策、米国の公共図書館でのビジネス支援(松永明氏(中小企業庁事業環境部長))、医療起業の際の図書館活用のご講演(中山善晴氏((株)ワイズ・リーディング))、鳥取大学図書館の活用法の報告などを行いました。第二部では鳥取大学産学・地域連携推進機構での産学連携や鳥取県立図書館のビジネス支援を紹介後、菅原産学・地域連携推進機構長をコーディネータとしてパネルディスカッションを行いました。延べ約60名の参加者がありました。「もっと時間がほしかった」「すばらしいプレゼンだった」などアンケートも好評で

した。一方で「よい内容なのに人が少ない」「大学図書館を利用できるなんて知らなかった」などPR 不足をご指摘いただきました。今後の課題とし、身近な使える大学図書館・公共図書館を皆さまへ広くお知らせしていきたいとおもいます。鳥取大学附属図書館では、今後も地域の図書館と連携し、ニーズを捉えて地域に貢献できる事業を展開していきたいと考えています。

ジュンク堂書店 三宮店にて、ブックハンティング

中央図書館では、平成 25 年 12 月 15 日、ジュンク堂書店 三宮店にて、ブックハンティング（学生による店頭選書）を行ってきました！

今回は、初の県外書店での選書ということもあってか、総勢 19 名の学生さんにご参加いただき、たくさんの本を選んでいただきました。



ジュンク堂書店 三宮店でのブックハンティング



鳥取大学附属図書館報 第123号 (2014年4月)

〔編集・発行〕 国立大学法人 鳥取大学附属図書館中央図書館

〒680-8554 鳥取市湖山町南4丁目101番地 [TEL] (0857)31-6728 [FAX] (0857)28-6346

〔E-Mail〕tosyokan-p@adm.tottori-u.ac.jp [ホームページ]<http://www.lib.tottori-u.ac.jp/>

Copyright (C) 国立大学法人 鳥取大学附属図書館 【本館報について一切の無断転載を禁止します】